飛梅

令和四年
夏号

一般社団法人 心游舎 総裁
彬子女王殿下 御寄稿
夢の一歩

太宰府天満宮の
御神忌大祭（三）

太宰府天満宮
建築余談 その九

飛梅 令和4年夏号　第203号　令和4年6月25日　太宰府天満宮社務所発行

表紙デザイン：前田景

聖地・菅聖廟

太宰府天満宮の由緒

太宰府天満宮は学問・文化芸術の神様と仰がれる菅原道真公（菅公）が永久にお鎮まりになる御墓所の上に御社殿を戴き、日本で唯一「菅聖廟（かんせいびょう）」と称えられ、天神信仰の聖地として一千百余年もの長い歴史を経て今日まで大切に守り伝えられております。

延喜三年（九〇三）二月二十五日、菅公は配所の地大宰府の南館（榎社）において五十九年の御生涯を閉じられました。御遺言により御亡骸は大宰府の地に葬られることになり、牛車に奉戴し東北の方角に葬列を進めていたところ、俄かに牛が臥して動かなくなり、これが菅公の思し召しであろうとこの地に埋葬し、祠廟が建立されました。続いて延喜十九年（九一九）勅命により御社殿が造営され、以後幾度となく勅使が差遣されるなど、皇室の御崇敬を集めるところとなりました。醍醐天皇は御生前の忠誠を追想され、延長元年（九二三）にもとの官職に復され、一条天皇の正暦四年（九九三）には正一位左大臣、さらに太政大臣を贈られ、「天満大自在天神（天神様）」と崇められることとなりました。

天暦元年（九四七）、菅公の孫にあたる菅原平忠が当宮の別当職に任命されてより、代々菅原家の子孫に祀職が受け継がれ、現在は菅公から数えて第四十代目の末裔（宮司）により祭祀が厳修されています。現在の御本殿は、天正十九年（一五九一）筑前国主小早川隆景の寄進により造営され、桃山時代の豪壮華麗な様式を今に伝え、国の重要文化財に指定されています。

菅公は平安時代随一の学者・文人・政治家として、その類稀な才能を発揮され、我が国の発展と文化興隆に多大な御功績を遺されました。『日本三代実録』『類聚国史』の編纂や遣唐使の廃止をはじめ、それまでの社会構造を見直し、日本人としての自覚を呼び起こす道を拓かれました。学問、詩歌、書道、歌舞伎など、日本文化の神髄をなす数々の分野において、菅公は至高の存在として今もなお尊崇されておられます。また、大宰府左遷後の不遇の境地にあっても、常に皇室の弥栄と御国の平安を一心に祈られ至誠一貫清らかな御生涯を全うされました。日本人が理想としてきた生き方や価値観、御国が向かうべき道を示された菅公は、古より現代に至るまで私達の心に寄り添いお見守り下さっています。

「さいふまいり」という言葉に表されるように、菅公の御神徳を慕い訪れる人々の波は途絶えることなく、今では「アジアの学問の神様」とも称され、国の内外より多くの人々が参拝に訪れ、真摯な祈りが捧げられています。

菅原道真公 一千百二十五年 太宰府天満宮 式年大祭

当宮では菅公に縁が深い「二十五」という数に因み、毎月二十五日の月次祭をはじめ、二十五年毎に節目となる重儀の祭祀を斎行し、御神霊をお慰め申し上げるとともに御神威並びに天神信仰のさらなる発揚を繰り返してまいりました。来る令和九年（二〇二七）は、「菅原道真公一千百二十五年 太宰府天満宮式年大祭」を迎え、御本殿・廻廊・楼門の大改修をはじめ、天神の杜の保全など様々な環境整備事業を予定しております。

天神様が永久にお鎮まりになる聖地として、未来へ向け益々の御支援・御協力を賜りますよう、何卒御高配の程宜しくお願い申し上げます。

令和四年初夏に想う

太宰府天満宮 宮司　西高辻 信宏

謹んで皇室の弥栄と御国の平安をお祈り申し上げますと共に、氏子崇敬者の皆様のご多幸を衷心よりご祈念申し上げます。

本年五月十五日は、沖縄が返還され本土復帰を果たして五十周年という節目に当たりました。先の大戦において、本土防衛の最後の砦とされた沖縄では、約三ヶ月にわたって日米両軍による激しい戦闘が繰り広げられ、多くの尊き命が失われました。戦後アメリカの施政権下に置かれ祖国復帰が叶わない中でも、長きにわたり日本への復帰運動が行われ、昭和四十七年(一九七二)五月十五日に二十七年ぶりの復帰を果たします。現代では沖縄が日本から引き離されていた事実や状況を知らない世代も増えているように思いますが、沖縄戦で犠牲になった多くの方々、アメリカ施政権下に置かれた歴史は忘れてはならないことであります。私も神道青年全国協議会が本年五月十一日に日本有人最南端の波照間島で執り行った「沖縄本土復帰五十周年奉告祭」に参列いたしました。五月十五日には当宮御本殿においても「沖縄本土復帰五十周年記念日国土平安祈願祭」を斎行し、祖国の為に尊い命を捧げられた英霊の御霊慰めを執り行うと共に、国の平安を心から祈念申し上げたところでございます。

さて、去る四月九日・十日には、畏くも彬子女王殿下の思し召しを賜り、一般社団法人心游舎設立十周年記念事業の舞台として当宮をお選び下さる栄に浴し、「平成中村座太宰府天満宮奉納特別公演」を開催していただきました。楼門を借景とした特設ステージで中村勘九郎丈・中村鶴松丈らが息の合った圧巻の毛振りを見せた「連獅子」を、中村七之助丈が早変わりも見事に華麗な「藤娘」を披露され、各地から集まった多くのお客様を魅了し、九日には子ども向けのワークショップも行われる等、歌舞伎という大切な日本文化に触れていただく大変貴重な機会となりました。

また、四月二十二日から二十六日の五日間にわたって、新型コロナウイルスの影響で一年延期されていた俳優のムロツヨシ氏主宰の「muro式・がくげいかい」が天神ひろばで開催されました。「桃太郎」を題材にした、ムロ氏を中心としたカンパニーの温もりと笑いに溢れた舞台となり、幅広い世代に楽しんでいただけたのではないかと思います。

新型コロナウイルスの影響も少しずつ落ち着きをみせ、最近では当宮にご参拝いただく方も増えてきております。本年は御神木の飛梅が例年より大変多い六六八個の実をつけ、それに呼応するかのように境内の梅の木々にも多くの実がなりました。梅の実ちぎりに際し、三年ぶりに県内の保育園、幼稚園の園児達や崇敬会青年部の皆様に助勢をいただくなど、参拝者・崇敬者の皆様と交流出来る機会が増えてきていることを大変嬉しく感じております。

菅原道真公が永遠に鎮まります「祈りの場」を守り伝えながら、四季を感じていただける環境づくり、新たな文化が生まれ育まれる神社づくりを、これからも進めて参りたいと思います。

夢の一歩

一般社団法人 心游舎 総裁　彬子女王

心游舎のキッズキャンプで出雲を訪れたときのこと。ご遷宮の終わったご本殿を見ながら、参加していた子どもが「六十年後の心游舎はどうなっているんでしょうね」と言った。「そのころは、君たちの時代…」と言いかけて、言葉を飲み込んだ。六十年後、私は生きていないだろうし、問いかけた子も七十歳を超えている。定年を迎え、悠々自適な生活をしているだろうか、後進には負けぬとまだまだ頑張っているだろうか。なんにせよ、一線からは退いているであろう年齢であることは間違いない。「みんなの子どもや孫の世代が支えてくれているといいね」と言って、しばらくぼんやりと心游舎の行末を考えてしまったのだった。

心游舎はこの度、十周年という節目の年を迎えた。当初は銀行口座の開設を断られ、数か所の銀行を周ったこともあったし、募集をしてもなかなか人が集まらず、近所の児童館やスーパーにチラシを貼ってもらいに行ったこともあった。そんな苦しかった時期から、諸手を挙げて心游舎の活動を応援してくださり、今も変わらないご支援を続けてくださっている太宰府天満宮で、十周年記念事業として、平成中村座特別公演とワークショップを開催することができたのは、本当にありがたいことだった。

新型コロナウィルスの流行により、心游舎の活動も縮小を余儀なくされた。子どもたちに本物の日本文化のすばらしさを直に感じてもらうため、対面でのワークショップが活動の中心

だったが、それが適わなくなり、オンラインでのワークショップやトークセッションの配信が、この二年間の活動の主軸となった。オンライン中心にしたことで、会員さんは飛躍的に増えたし、心游舎の活動を広くたくさんの方たちに知っていただくきっかけになったことは喜ばしい限りなのだけれど、毎月のように会っていた子どもたちに会えなくなり、反応を直接感じられなくなったことに、多少のもどかしさは感じていた。

その対面のワークショップを、十周年の機会に、太宰府天満宮で再開することができた。ワークショップ開始前に、会場をうろうろしていると、お馴染みの顔が続々と入り口から入ってこられる。「彬子様～！」「お久しぶりです～」「お元気でしたか？」「写真撮っていただいていいですか？」そうそう、心游舎のワークショップってこんな感じだった、とうれしくて涙が出そうになった。舞台に上がり、司会の澤村國久さんの「みんな前向こうか？」の声

も全く耳に入らない様子で、楽器を鳴らすことに夢中になっている子どもたちの姿に、本物の力はしっかり伝わっていると思えた。公演の最中にお囃子に合わせて子どもが体を動かしていたとか、公演後に毎日連獅子の絵を描き続けているという子や、毛振りの真似をしている子がいるという話に、記憶の種はしっかり蒔かれたことも実感できた。

今回何よりもうれしかったのは、太宰府天満宮幼稚園での和菓子ワークショップ一期生、初代心游舎キッズの森大晟くんやアンダーソン羽菜ちゃんが、おもてなしブースのお手伝いをしてくれたことだ。創設当時から、心游舎のワークショップに参加して、日本文化に興味を持った子どもが、大きくなって心游舎のお手伝いをしてくれるようになり、ゆくゆくは心游舎の理事として支えてくれるようになるというのが夢だった。そんな夢の一歩を、十周年の太宰府で踏み出せたような気がしている。

彬子女王

寛仁親王殿下の第一女子として誕生。学習院大学を卒業後、オックスフォード大学マートン・コレッジに留学。日本美術を専攻し、海外に流失した日本美術に関する調査・研究を行い、二〇一〇年に博士号を取得された。女性皇族として博士号の取得は史上初のことである。子どもたちに日本文化を伝えるために、ご自身で一般社団法人「心游舎」を創設、総裁に就任され、全国各地でワークショップなどを行われている。

国宝『翰苑』を取り巻く謎を紐解く（下）

顧問　味酒　安則
（文化研究所主管学芸員）

勧学院の雀は『蒙求』を囀る

勧学院とは、藤原冬嗣が弘仁十二年（八二一）に創設した「大学別曹」という一門の子弟のための私塾である。『蒙求』は、漢文の初心者用の教本で、中国の故事や名言が記されていた。そこで、勧学院のあたりの雀は、若い生徒が音読する『蒙求』を聞いて、その音色を暗記して鳴いているというものだ。

平安時代の公家の子弟をはじめとして、わが国の学問の基本は「書写音読」だった。『翰苑』の意訳のひとつは「文章の世界」であり、対句で口調を整える四六駢儷体を用い、中国でも日本でも書写の教本だったと考えられる。このことは、『翰苑』の意味や性格を決定づけているといえるのである。

1.『翰苑』は歴史書ではなく文章の教本だった

邪馬台国の研究をはじめ、古代史研究者の間で、この『翰苑』はあまり重視されてこなかった。それは、『魏志』や『後漢書』より採録した以外の情報があまりにも少なかったこともあるが、邪馬台国を「馬台」、卑弥呼を「卑弥」と表記するなど誤りがあることなど、誤字や脱字が多いため、史料的な価値はさほど高くないとされてきたためだ。しかし、これは単なる誤字や脱字ではなく、唐の文化人の間で流行していた「四六駢儷体」で記述されていることによる。四六文は、4字と6字の句を連ねて調子を整え、美しい文章を作るため、3文字の語句は2字に省略されているのである。『翰苑』の目的は、主体は文章、それも四六駢儷体と対句を学ぶための教本にあると考える。そもそも、『翰苑』の翰は鳥の毛、筆で、書翰（簡）を意味する。苑は園で一定の領域を表している。すなわち、『翰苑』は「文章の世界」と意訳できるのである。

2. 四六駢儷体とそれを巡る学者の争い

「四六駢儷体」は、四六文・駢儷文・駢文ともいって、漢文のひとつの体形である。古文と相対する新形式で、漢の時代に源を発し、六朝時代から唐の時代に知識人に大流行した。

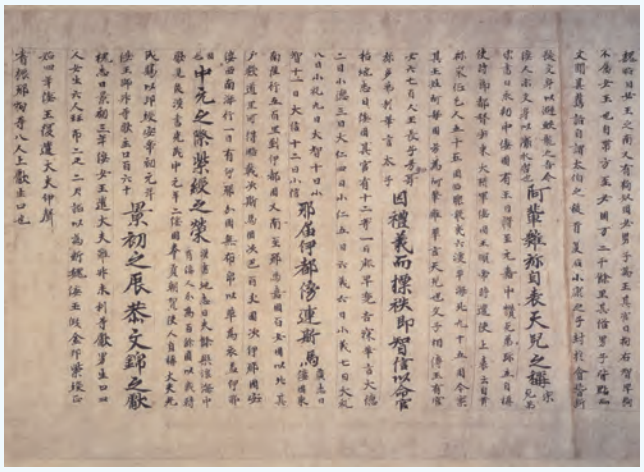
4字及び6字の句を基本とし、対句を用い、平仄（平調子と韻律の配列）に留意し、声調を整える。文辞は華美で典故（故事や故実）を多用する。漢文や漢詩に多く用いる。わが国では、奈良・平安時代前期に盛んになり、その最高峰の作品が菅原道真公編の『菅家文草』といわれている。菅原道真公の祖父にあたる菅原清公に始まる「菅家の学問」、すなわち、「文章道」の真髄は四六駢儷体にあったと言ってもよい。

「文章経国」は、嵯峨天皇の勅で弘仁年間（八一〇～八二四）に編纂された勅撰漢詩集の序文で述べられた政治理念である。「漢詩文の制作が盛んに行われて文学が栄えることは、国家経営の大業につながる。」というもので、この時代の律令体制の再建強化を図るための精神的基盤でもあった。その嵯峨天皇の理想と一致して原動力となったのが、菅原清公だった。その清公は、嵯峨天皇の文化的側近になったこと、また、清公が遣唐使で中国から大量の書籍を持ち帰ったことなどで、朝廷内での立場が大きく飛躍したのである。

しかしながら、承和九年（八四二）、嵯峨天皇と菅原清公が共に逝去した後の貞観八年（八六六）に、儒家の中から「詩人無用」の声が巻き起こる。明らかに、菅家廊下そしてその当時の主宰者だった菅原是善に向けた批判である。これは、宮廷の詩宴に漢詩を詠む詩人自体、あるいは、漢詩の存在を否定するものではなかった。彼らが学ぶ「紀伝道」（文章道）に、美しい文脈や優美な表現はいらないというものなのである。元来、大学寮の学科の中で実務にあたる紀伝道は、朝廷の官吏官僚を育成するもので、公文書作成の勉強に詩的表現は必要ないというものだ。これは「詩人無用」というよりは「四六駢儷体無用」ではないか。すでにこの時代から「儒家」「儒官」そして学閥の分裂が始まったと見てよい。となると、「四六駢儷体」も昌泰の変（道真公左遷）の遠因となっていたといえるかもしれない。

写真提供　大野城　心のふるさと館

「倭国」の前半



「倭国」の後半

3.『翰苑』には植物編もあったという史料

伝本の『翰苑第三十巻』にない記述が、『翰苑』の逸文として引いたものがある。この史料は、『秘府略』で、天長八年（八三一）淳和天皇の勅命により滋野貞主らが撰述したもので、一千巻に及ぶ。これは、漢字に関して中国の典籍の記述を類聚（同類のものを集めたもの）した類書である。その中に『翰苑』の逸文として、「黍（きび）、栗（くり）、錦（にしき）、社若（かきつばた）、菖蒲（しょうぶ）等の植物編が残存している。このことをもって、研究者の中には、『翰苑』複数巻渡来説を唱える方もいる。

4.伝本の筆者、菅原（高辻）為長は大儒学者だった

菅原（高辻）為長は儒学者で漢詩人でもある。文章博士となり、土御門天皇より五代の天皇の侍読を務めている。そして、この時代の詩壇の中心人物でもあった。

「元号」は年につける称号のことをいう。

天皇が改元を必要とする諸事情を感得されると、太政大臣または左右大臣にお伝えになる。その「仰せ出」を受けて、大臣が文章博士や式部大輔らの学者に、新元号の候補名やその意味や典拠を明らかにする文章などの提出を命じる。学者はこれに応えて、儒学を中心とする漢籍の中から、新元号にふさわしい候補を選定し、太政大臣、左右大臣に答申する。このことを「勘申」という。

菅原為長は、なんと十八回の改元に関わり、総数六十の元号案を勘申している。そのうち、元号として天皇の「勅定」を賜ったのが十あり、後世に採用されたものを加えれば十五となる。幕末で有名な「文久」も約六百年前の為長の勘申だったのである。

5.『翰苑』の遍歴の考察

もともと、張楚金は、子弟や童蒙のための対句の学習をはじめとする例文集として『翰苑』を編纂したのではないか。施註者の雍公叡は、唐代高宗の皇弟の息子李叡と疑う研究者もいて、雍注も唐代の成立とみている。その後、延暦二十三年（八〇四）に菅原道真公の祖父清公が遣唐判官として唐に渡り、皇帝に謁見した。その際に『翰苑』が目に留まり写本を購入するか、書写したのではないだろうか。そして、清公は、空海のように沢山の書籍を携えて無事に帰朝した。清公は、邸内に書斎を造る。書斎はこの時代は書庫（図書室）のことであり、学習する部屋は文房といった。それらで、清公は中国の漢詩文及び歴史を学ぶ「文章道」の興隆に貢献した。となると、菅原道真公もこの『翰苑』で対句や駢儷文を勉強された可能性は大きい。対句や駢儷文は漢詩文には必要不可欠で、菅家の学問の核心でもあった。平安後期、清公から十二代後の菅原為長が、この伝本を寸分の狂いもなく書写する。この時、もしくはそれ以前に雍氏の名が何らかの理由で挿入されたとも考えられる。それが、江戸後期、京の宗家高辻家より四代にわたり、別当職の太宰府大鳥居家（現西高辻家）に猶子として西下されるにあたり、持参品として伝来したと、推察するものである。

『翰苑』は、多くの謎を秘めながらも、古代史そして古代文学の研究のために、その余地が沢山ある。わが国にとっても、古代の文化享受の実情を検証する上で、また、当時の中国周辺諸国の様子、さらに、古代日本の歴史の解明に指針を与える端緒を内包しているのである。その観点からも、国宝『翰苑』を窮める研究者を待ち設けたい。

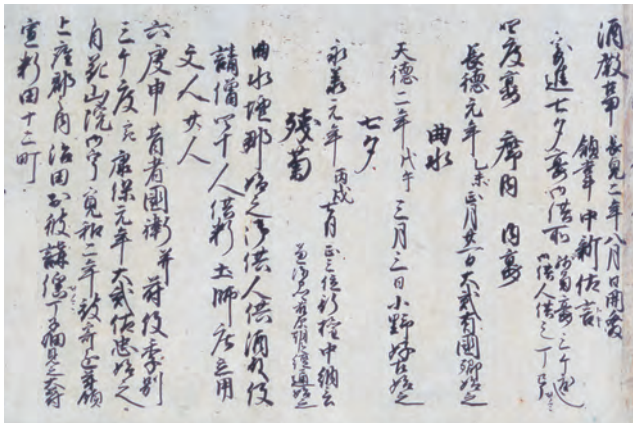
※参考文献
湯浅幸孫校釈『翰苑校釈』国書刊行会、昭和五十三年
所　功著『飛梅第六十八号』所収「菅原氏の勘申した年号」昭和六十二年
嵐　義人著『余蘊孤抄』所収「翰苑の価値」アーツ・アンド・クラフツ、平成三十年
井上正彦著『太宰府の歴史4』所収「太宰府天満宮の文化財」西日本新聞社、昭和六十年
味酒安則著『国宝翰苑の世界・図録』所収「国宝、『翰苑』を取り巻く9つの謎」大野城心のふるさと館、令和三年

四度宴　内宴

顧問　味酒　安則

大宰府官人たちによる京の都の諸祭事の文化移入は、創建された太宰府天満宮（安楽寺）の御祭神菅原道真公への追慕・追善・御霊和めの祭事に、新たな宗教行事を始行したものだといわれています。その典型的なものが宮中四宴といわれる「四度宴」で、重要文化財『天満宮安楽寺草創日記』には次のように記されています。

内宴　長徳元年（九九五）乙未正月廿一日大弐有国卿始之
曲水　天徳二年（九五八）戊年三月三日小野好古始之
七夕　永承元年（一〇四六）丙戌七月正三位行権中納言兼治部卿藤原朝臣経通始之
残菊　曲水壇（壇）那始之
御供人供酒殿役請僧四十人供料土師庄立用文人廿人



『天満宮安楽寺草創日記』（重文）

さて、これらの太宰府天満宮の四度宴を特徴付けているのが「内宴」にあると思われます。内宴は、中国の唐の時代に盛んに行われた祭事で、わが国では菅原道真公の編纂された『類聚国史』によると嵯峨天皇の大同四年（八〇九）に始められたと記されています。天皇は、通常の年では最も重儀といえる正月の祭事、一連の行事が一段落した一月二十一日より二十三日の間、中に「子の日」があればその日に、宴を開催されました。

実は、この宴には、正月行事に参画した大臣公卿の近臣らを慰労する私宴的な意味がありました。内宴の日、天皇は仁寿殿の南面東廂に出御され三献を行った後、詩歌、女楽という女性が奏する歌舞の披露があり、さらに采女や更衣らの女官が陪膳を勤める饗宴が催されています。

当宮の内宴は、『草創日記』に、長徳元年（九九五）正月二十一日、大宰大弐藤原有国が始めたと記されています。しかし、この年次の方を執れば、大宰大弐は藤原佐理となります。佐理は、摂政関白藤原実頼の孫で能書家、三跡の一人として有名です。正暦二年（九九一）四十八才の時、大宰大弐に任ぜられ、次いで、正三位に叙せられます。一条天皇は佐理を大宰府へ下向させたことを悔いられ、使者を派遣されるほどでした。しかし、『日本紀略』によると、正暦五年（九九四）に、大宰府政庁官人と宇佐八幡宮の神人との乱闘事件の叱責を受け、一言も弁明しなかったので、長徳元年（九九五）十月に大宰大弐を解かれました。この年の正月に内宴を始めたことになります。帰京後は許され、正三位兵部卿に任じられています。

大宰府での内宴がどのような内容だったのか、それを伝えているのが夢想によって「神幸式」を始めた大宰権帥の大江匡房が同じ年の康和三年（一一〇一）新春、廟前で斎行された内宴に参宴し、詩を賦している事で解ります。『本廟続文粋』に所収されている詩序の中で、道真公は、「風月本主、社稷昔臣」で、自分は、「累葉廊下之末弟也」と記しています。「先生は、国家の功臣で、私は菅家廊下の末弟であります」。天神さまへの追慕の心、湧きいでる尊敬の誠、碩儒、大学者としての崇敬の念が感得できます。

通説的には、宮中の内宴がほぼそのままの形で太宰府天満宮（安楽寺）に移されたのであろうといわれていますが、御本殿の廟前で舞踏や饗応が行われたとは考えられません。むしろ、大江匡房に代表されるように、漢詩や和歌の献上こそが天神さまへの追福・法楽の手向けだったと思うのです。

太宰府天満宮にとって四度宴そのすべてが、永久に鎮まります菅原道真公（天神さま）への法楽のための詩歌の献詠の祭事だったといえます。大宰府官人による中央貴族文化の直接移入と明言するのは結果論に近いものがあります。江戸前期の筑前国福岡藩の儒学者である貝原益軒は、『太宰府天満宮故実』に次のように記しています。

また古へ此御神の為年毎に四度の宴を行はる。内宴正月二十一日、曲水、七夕、残菊十月五日、是なり。凡此日は別当以下社人悉一所に集り、歌を詠じ文人詩を献じて詩歌管絃の会ありとかや。此御神はきはめて風雅におはしましければ、神の御心をなぐさめ参らせん為成るべし

太宰府天満宮は草創以来、道真公の御霊和め、追善供養することが、その天神信仰の第一義であり、且つ、多くを占めていました。その意味においても「御墓所信仰」の聖地であるといえましょう。ここが全国の天満宮と唯一異なる所なのです。それで、境内の中にあって、御本殿は、御神忌祭、更衣祭、神幸式、連歌会等々の道真公に関わる神事祭事のみを行い、一方、昔楼門前にあった大講堂では、修正会（鬼すべ）、花供養、祖師会等々の天台の修法による仏事法会が行われています。このように、創建当初から明治維新に至るまで並立していたのも、大きな特色といえます。

道真公がこよなく愛された漢詩と和歌、そして、室町期より明治期の長きに渉って連歌が、御神前に捧げられました。現代においても、俳句・短歌・連歌が、神職・職員はじめ有志の方々によって『献詠集』にまとめられ、御神前に奉納されているのです。

※参考文献
真壁俊信著『天神信仰史の研究』続群書類従完成会　平成六年
川添昭二著『九州の中世世界』海鳥社　平成六年

菅家の言ノ葉 詩歌の世界（四）

権禰宜　味酒安儀

菅原道真公は、貞観十二年（八七〇）二十六才の時に対策（方略式）に合格され、正六位上を授かり、朝廷の官僚の道を歩み始められました。因みに公家は、五位以上が殿上人、いわゆる貴族で、三位以上の人は公卿と呼ばれています。そして、翌年の最初の辞令が玄蕃助でした。この官職は治部省の下で、外国使節の接待や送迎を掌る役目があり、中国語と中国文学への理解が必要でした。そこの次官に道真公は任命されます。さらに二か月後、少内記の辞令を受けられます。内記とは、中務省の中で詔勅や位記の起草を行う所で、文章道出身者の憧れの役職でした。位としては前職と同等ですが、太政官に直結している点で、大きな栄進といえます。道真公はこの官職を三年間務められました。

貞観十四年（八七二）二十八才の時に、少内記のまま存問渤海客使を命じられます。渤海は中国北部を中心に七～十世紀に栄えた国で、わが国に日本海を横切って使節を送り込んで来ていました。その接待役が客使です。ところが、すぐに慈母が亡くなりました。本来ならば、一年間喪に服すところ、半年足らずで勤務に復帰されています。貞観十六年（八七四）正月、従五位下を授かり殿上人、貴族になられました。その七日後、兵部少輔の辞令が発せられましたが、一カ月後、民部少輔の辞令を受けます。兵部が武官の人事であるのに対し、民部は課税、納税の財務とそれに関わる民政を行い、律令制度の根幹を成す部局です。この制度の歪や国内での問題点、その打開策に心を痛められます。

いよいよ、元慶元年（八七七）三十三才の正月、式部少輔に転じられました。この式部省は朝廷の式典や叙位に関することなどを掌り、その下に大学寮があり、さらに文章博士がいます。道真公はこの年の秋、十月十七日、文章博士を兼務する除目を得たのです。若年で鴻儒の家としての伝統を受け継がれました。

「早衙」

廻燈束帯早衙初　燈を廻らして束帯す　早衙の初め
不倦街頭策蹇驢　倦まず　街頭に蹇へたる驢を策つことを
暁鼓鼕鼕何處到　暁の鼓は鼕鼕として　何れの處にか到る
南爲吏部北尚書　南は吏部にして　北は尚書

早朝の参謁の儀式に出席するため、灯りを明るくして正装する
老いた馬に絶えず鞭をあてながら役所に向かう
役所に着いたころようやく聞こえてくる暁を知らせる太鼓の
音は、どんどん響いてどこまで届くのだろうか
それは南の式部省、北の中務省の役所であろう

朝廷の「朝」は平原に日が昇る時を表し、日の出とともに臣下が天皇に拝謁し、執務を始めたことから朝議、朝政という言葉があります。「廷」は臣下が天皇に拝謁する特別な場所という意味です。平安前期の貴族や官僚、官吏はこのため出勤は早朝となりました。これは「気」の持つ力を大事にしたためともいわれ、気が増す午前中に集中して政務を行っていたようです。

道真公は、夜明け前の闇夜、馬の鞍に跨り、邸宅の紅梅殿宣風坊から西へ、それから朱雀大路を北上して、省庁に通勤されていました。そこで生涯を公人として全力で政務を執られたのです。そのような順風の時、元慶四年（八八〇）、厳父の従三位参議是善が六十九才で没しました。この時代「文章経国」の副産物として生まれた学閥対峙の中、道真公の孤独感はいよいよ高まります。それは、文章博士である上に、祖父に始まる私塾の菅家廊下の沢山の門人たちを指導して行かねばならないということでした。

元慶七年（八八三）七月、道真公が加賀権守を兼ねる辞令を受けました。前年の十二月に渤海客使裴頲らが来朝したからです。裴頲は極めて優れた漢詩人でした。そこで、朝廷は存問使の他に、菅原道真公と島田忠臣を充て贈答唱和して、見事にこの任を果たされたのです。

※参考文献　『菅家文草 菅家後集』川口久雄校注　岩波書店
『菅原道真』滝川幸司著　中公新書

「献詠集」について

「文化芸術の神様」に捧げる誠心

投稿いただいた献詠献句は優劣を競うものではなく、天神さまをお慰めし、道の隆昌を願ってご神前に奉納させていただくものです。皆さまの「誠心」を唯一菅聖廟、太宰府天満宮へお捧げください。

兼題

七月　「来」
八月　「恋」
九月　「見」

締切

毎月二十三日必着
（十二月のみ十五日）

自作未発表、神前奉納にふさわしい作品でお願いいたします
年初穂料　一、〇〇〇円
翌年一月「献詠集」をお送りいたします際に同封の、お振込用紙でご神納ください

葉書の書き方（例）

お問合せ　太宰府天満宮献詠係
〒八一八―〇一九五
太宰府市宰府四―七―一
〇九二（九二二）八五五一

第四回　布多天神社　～太宰府天満宮との御縁～

天神さまを巡る

布多天神社　禰宜　野澤　晃司

天神さまとの所縁

私がご奉仕する御社は東京の調布に御鎮座します布多天神社です。読みは「ふだてんじんしゃ」と読みます。字の如く「ぬの」が「おおい」という意味で、この地域一帯は【租】【庸】【調】の一つ【調】を整え、朝廷に献上していたと伝承されております。従って、布にまつわる地名や和歌、布を多摩川にさらす絵図など多く見られます。

創建は古く定かではありませんが、延長五年(九二七年)に制定された「延喜式」に名を連ねる古社である事がわかります。社伝によれば第十一代垂仁天皇の御代、約一九五〇年前の創建と伝わっております。私見では多摩川近辺からは縄文時代の遺跡が多く出土される事からも、古代は精霊的な信仰がされており、時代を経て洪水を避ける為に今の地に遷座し、今はお社としてお祀りされているのではないかと推測します。

このように調布は古代から人が定住し、自然に適合しながら生活様式、生業を変え発展してきたと考えます。

室町時代になり菅原道真公が布多天神社に合祀され、そして江戸時代を迎えると、人々の生活が安定した事で学問が奨められ、学問の神様である菅原道真公は人々の身近な存在として、より暮らしの中に浸透していったのではないかと考えます。

太宰府天満宮での思い出

六月は【斎田御田植祭】が斎行されます。氏子会や農業関係者等、多くの方が今年の豊作を祈念します。斎田には斎場が設けられ、四方に大型うちわが配置されます。祝詞奏上に続き斎田を清めた後、代掻き神事を行い縦綱横綱を引き廻らし宮司以下早乙女が田植えをします。私の役は赤褌で牛を牽く「代掻き」役でした。式次第には「滑稽を演じながら」と書かれていましたので熱演しました。動かなくなった牛に付き押され、私は全身で泥を掻き寄せるように倒れました。そして、私の姿を皆さんにお披露めし笑いを誘いました。氏子さんからは「よかよか」と暖かい声を賜りました。

現場の設営、祭儀、神事、直会まで斎行する事は容易ではありません。神職と氏子さんとの信頼関係があってこそ、喜びある充実し

たお田植祭が斎行できるものであると実感しました。

七月は【七夕祭り】と【夏祭り】が開催されます。参加者は和装になり風流になります。催しや子供遊びは神職が企画考案します。七夕祭りでのライトアップされた竹笹トンネルは、幻想的で圧巻です。夏祭りでの盆踊り大会では、神職が太鼓で音頭をとり、この日の為にと練習してきた子ども達が一生懸命踊ります。踊る曲は天神さまの歌や炭坑節、天満宮オリジナル曲やマイケルジャクソン等もあり、すべての企画が手づくりで、至る所に工夫が見られました。宮司夫妻を始め天満宮職員が浴衣に着替え、参拝者と隔て無く交流している姿に驚き、大家族が集まったようなお祭りに心から感動しました。

九月は一年でもっとも大切な【神幸式大祭】が五日間にわたり斎行されます。私は全ての神事にご奉仕させて頂きました。

大祭に先立ちまして、大祭の無事安全を祈念する為、山の中で斎行されます「大行事」という重要な神事も任されました。神事が始まると、白驟雨にあいました。氏子会の皆さんは全身ずぶ濡れになりましたが、皆晴れ晴れとした面持ちでありました。氏子会の方が「大行事で雨降ったら、祭りは雨降らんたい」と言い伝えを教えて頂きました。

大祭奉仕での私は【御下りの儀】で先導役として馬に跨り、神輿渡行を先導する大事な役を担わせて頂きました。ここでも感動と驚きがありました。担ぎ手は二十五歳までの氏子会の若手で、下は十五歳の子もいます。大人達は周りを囲い、見守りながら静に随行します。青年が「お前ーお静かにお盛ましてー」と声を張り誘導します。荘厳な雰囲気の中に一人の青年の声が響き、若い力のみでお神輿が静かに動き始めます。装飾された鏡の重なり合う音が呼応し、静謐な雰囲気が漂います。拝観者の前をお神輿が通ると、皆自然と手を合わせ、目を瞑ります。このような情景に感慨無量でありました。

氏子さん達の言い伝えは誠であり、一度も雨にあう事なく無事に還御されました。今日までの日々に思いを馳せ、風光明媚な自然を眺めると、山の端に浮かぶ茜雲が滲んで見えました。

おわりに

御祭神菅原道真公が過ごされた地を全身全霊で感じ、太宰府の水を五臓六府に沁み渡らせてご奉仕できました事は、この上なく貴重な体験でありました。この地で過ごした一年間は、毎日が新鮮で多くの経験と感動をさせて頂きました。さらに、宮司様（現最高顧問）を始め職員の方々、氏子の方々から頂いた多くの学びは生涯の心得となりました。

改めて皆様に感謝の気持ちをお伝えできる機会を頂きました事を、心から深く感謝申し上げます。

野澤　晃司（のざわ こうじ）
平成二十四年　国学院大学別科神道専修Ⅱ類　卒業
平成二十四年　都内神社　奉職
平成二十六年　布多天神社　奉職　権禰宜拝命
平成二十八年　大宰府天満宮　奉職
平成二十九年　布多天神社　奉職　禰宜拝命
北多摩神道青年会むらさき会　副会長

太宰府天満宮の御神忌大祭（三）

森　弘子

戦後混乱の中から

御神忌一千五十年大祭は、昭和二十七年二月十五日の大祭始祭に始まり、三月三十一日の納祭までの一ヶ月半、晴天にも恵まれ、厳かにも賑やかに繰り広げられた。それは、戦中戦後の暗い谷間を脱し、明るい未来への発展を予感させるものであった。

昭和二十年八月十五日、昭和天皇の「大東亜戦争終結ノ詔書」は発せられた。九月二日のミズリー号上での降伏文書調印の後、直ちにGHQが設置された。その内部機構として民間情報教育部があり、その下に宗教課が置かれバンス博士が課長として宗教一般の監督に当たることになった。

十月十四日には政教分離の方向が打ち出され、十二月十五日には、GHQより「神道指令」の覚書が、日本政府に手渡された。この指令の目的は「神道を国家より分離する」ことにあり、最後に「神社神道ハ国家カラ分離セラレ、ソノ軍国主義乃至過激ナル国家主義的要素ヲ剥奪セラレタル後ハ、モシソノ信奉者ガ望ム場合ニハ、一宗教トシテ認メラレルデアラウ」と結んでいる。二月二日には、神祇院官制が廃止され、明治以降八十年間に亘る神社に対する国家管理に終止符が打たれた。翌三日には神社本庁が開庁し、続いて各県神社庁が設立され、新しく神道は宗教法人として出発した。一方、千人近い神職が追放されるという悲劇もあった。

このようなGHQの方針におもねる人々の間に、神社に対する軽視、侮蔑の行動があちこちでおこり、戦時中一心に神社に戦勝祈願や家族の無事帰還を祈った庶民の間にも「神も仏もあるものか」という考えが拡がり、人々の神社離れは加速していた。

そんな不安のまっただ中、太宰府神社を守ったのは、信稚宮司を中心に、戦地に赴いていないわずかな職員だけ。二十五歳で盛大な千年大祭を齋行された信稚宮司も千五十年大祭を目前にすでに老境にあられた。若い跡継ぎの帰還が渇望される日々であった。

昭和二十一年三月二日、信貞氏復員のニュースが町中に流れると、「よかった、よかった」と町は喜びに溢れかえり、多くの人々が西高辻邸に押し寄せ、大宴会となった。帰宅翌日には御神前に帰還奉告をされ、早速、新しい時代に即応する改革を次々に実行していかれた。

まず最初に成された大仕事は「神社名改称」。当宮は、国家神道下、明治五年より「太宰府神社」と称してきたが、天神信仰の長い歴史に鑑み、「大衆の中に生きる天神信仰」ということを旗印にかかげ、昭和二十二年二月七日「太宰府天満宮」に改称されたのである。このことこそ、千五十年大祭をどのような大祭にするのかの基本理念でもあった。

在郷軍人の先勝祈願祭・燈籠の銅の火袋は供出され竿だけが残っている

戦時中の祭典・参列者は女性ばかり

莫大な資金の調達に向けて

昭和二十三年四月三十日、信貞氏は信稚宮司の跡を継ぎ、第三十八代宮司に就任された。いよいよ大祭に向かって重責を負って始動である。

一番中心となる事業は御本殿の修復である。戦前、昭和七年より国による太宰府神社整備計画が立案され、予算がついていたが、戦争でご破算

となり、その間に御本殿の老朽化が進み、塗装ははげ、屋根は雨漏りというひどい状態になっていた。修復の為の資金調達は、何にも増して重要な課題であった。すでに信貞宮司就任前の二十三年二月に、崇敬者、講社員に充てて修理の寄附金懇請状が出されていたが、それに加えて積極的にお金を集める方策として、江戸時代に社寺の修理費を集めるため「富クジ」が発行されていたことに着目された信貞宮司は、この手法を何とか導入できないかと考えられた。

ちょうど昭和二十四年は丑年にあたる。そこで、二十四年三月二十日を牛まつりの日と定め、一枚百円（今の一万円くらい）の牛クジを一万枚発行し職員全員に割り当て、日直だけをお宮に残し、福岡県下は言うに及ばず、佐賀・長崎、熊本にまで売りに回った。その苦労は大変なもので、昔、先輩職員の皆さんから牛まつりの苦労話をよく聞かされたものだった。

牛まつり

今でこそ、牛を日常身近に見ることはなくなったが、昭和三十年代頃までは、牛は農耕や運搬に欠かせないものであり、宝満山の隣峰の愛嶽山は牛馬の神様として賑わいをみせていた。天神さまは学問の神であるとともに、農村部では農耕の神として広く信仰され、その農耕に必要な牛もまた天神様のお使い獣として大切にされていた。

道真公自身、御誕生日が丑年の丑の日、亡くなられた日も丑の日。天満宮御本殿の地は、道真公の屍を載せた牛車の牛が座り込んで動かなくなった場所とされる。それ故、境内には伏せた姿の牛の像が其処此処に見られる。なかでも宮司邸前の御神牛像は、道真公ご誕生の承和十二（八四五）年と同じ乙丑の年にあたる昭和六十年の乙丑の大祭に冨永朝堂師が製作されたもので、今や大変な人気者。参拝者がインバウンドまで、列を成して御神牛の身体を撫でている。

牛クジの企画は、全職員一丸となっての努力で、四百万円の浄財が集まり、三月二十日紅葉谷（現在のだざいふ遊園地）相撲場に造られた特設舞台で筑紫郡十町から選ばれたモンペ姿の十人の牛まつり幸運の女神が抽選を行い、一等五歳の牝牛、二等二歳の牝牛、三等自転車の当選者が選ばれた。牛市競売や演芸も行われ、NHK福岡放送局の実況中継もあり、戦後初めて大勢の人々が集まったこの祭りは大いに賑わった。

しかし四百万円から諸経費を差し引くとわずかに百万円。楼門の屋根の葺き替えがやっとだった。次に考えついたのが「奨学資金付クジ」。これには、天神さまが学問の神であることを広く浸透させようというねらいもあったが、収支はトントン。骨折り損に終わった。

次に「東風ふかば……」の歌を書いた鉛筆を考案した。この鉛筆発売にも、資金面の苦労などあったが、鉛筆の品質が良く、また割安だったこと、加えて学問の神様の鉛筆だからということで、飛ぶように売れ、その収益で二十六年に児童会館を建て、修学旅行の児童・生徒のための宿泊所とした。

菅公会と地元奉賛会

大祭の最大の資金源は各地にできた菅公会と地元太宰府町にできた奉賛会による募金であった。一千五十年祭太宰府町奉賛会は、斎藤広路町長、前田清市氏子会長等が発起人となり、鬼木愛次郎氏を会長に昭和二十五年八月に発足し、氏子各戸毎に奉賛金を割り当て、五カ年計画で募金を達成した。

「菅公会」は西日本鉄道の初代社長村上巧児氏の提案で、東京、大阪、北九州、福岡の政財界のトップクラスの人々で組織された会であった。村上氏は、その豊かな経験と見識と鋭い洞察力によって、戦後の太宰府天満宮の復興と現在の繁栄の基礎造りに計り知れない力を頂いた人だった。信貞宮司も「私が宮司になって最大の人であった」と述懐されている。

むろん、それぞれの都市の菅公会役員へのご就任については、信貞宮司・小鳥居寛二郎権宮司がお一人お一人お願いして回り、募金についても自ら率先して頭を下げて回られた。晩年信貞宮司は「募金ができてはじめて一人前の神主と言える」とよく言われていたが、お願いする方々に頭を下げ、天神さまの御神徳に対する理解を得、大祭に大きな資金が必要なことをご理解頂き、寄附をしていただくまでもっていくには、精神的負担は大変なもので、それを何人にも、何社にも繰り返し繰り返し行うことは並大抵ではなかった。

人も世も変わり果つとも神燈（みあかし）のひかり守らむこの文の宮

という、自作の歌を書いた紙をポケットにしのばせ、「募金は〝私〟のためではない。神様のため、ひいてはその光に包まれる人々のためにするのだ」と、何度も自分に言い聞かせて頑張られたという。こうした誠意は人々にも通じ、次第に目的は達成されていった。

大祭の総事業費は四千二百万円、そのうち国庫補助は追加申請まで加え六百万円、県費補助は三百万円。残りは菅公会、奉賛会はじめ多くの人が寄せた浄財だった。ハワイやロスアンゼルスからも募金が寄せられた。その大半は、御本殿、楼門、志賀社、太鼓橋等の営繕、防災設備、境内の整備に充てられた。（つづく）

「菊畑茂久馬展」

令和四年三月十九日(土)～五月八日(日)

宝物殿では、生涯に亘り福岡を拠点に活動を続け、戦後日本の美術史に大きな足跡を残した画家 菊畑茂久馬氏(きくはた・もくま 昭和十年～令和二年)の絵画を紹介しました。

徳島県出身の漁師であった父と、長崎県五島出身の母との間に長崎で生まれた菊畑氏は、三歳で父を亡くし、昭和十九年、福岡市で働く母のもとに移りますが、その母も十五歳で亡くします。天涯孤独となった菊畑氏は、好きな絵画にのめり込んでゆき、昭和三十二年には、反芸術を掲げた前衛美術集団「九州派」のメンバーとして頭角を表します。

画業以外では昭和四十五年にアメリカから返還された戦争記録画、後にユネスコの世界記憶遺産に登録された山本作兵衛の炭坑記録画を徹底的に検証したことでも知られます。

令和二年五月に菊畑氏が亡くなって以来、アトリエに大切に保管されていた作品のうち、「天動説」から「春風」まで、大作を含む九点の展示がご遺族の全面的なご協力により実現いたしました。ご遺族をはじめ、本展開催のためにご尽力を賜った関係各位に心から感謝申し上げます。

太宰府天満宮アートプログラムvol.11

現在は、平成十八年から展開する太宰府天満宮アートプログラムの第十一回目として、ニューヨーク在住のアーティスト、田島美加氏(たじま・みか 昭和五十年～)の個展「Appear」を開催しています。

〝Appear〟とは、目に見えるようになること、知覚されること、または、ある証拠によって明らかにされることを意味します。日本人の両親のもと、アメリカで生まれ育った田島氏は、西洋と東洋の交錯、物質・エネルギー・人間の精神の遷移、変換などをテーマにしてきました。

令和元年に太宰府を訪れた彼女は、神社と神道、そして千百余年の間、循環しながら歴史を繋いできた当宮への考察を通して、十点の新作を制作しました。

宝物殿には、御本殿での祝詞を収録した音源をプログラミングによってパターン化し、ジャカード織機で織るシリーズ「ネガティブ・エントロピー」を始めとする作品が並び、太宰府天満宮・太宰府の場所性、この地で古来営まれてきた不変の祈りを今に伝える文化財とあわせて紹介しています。

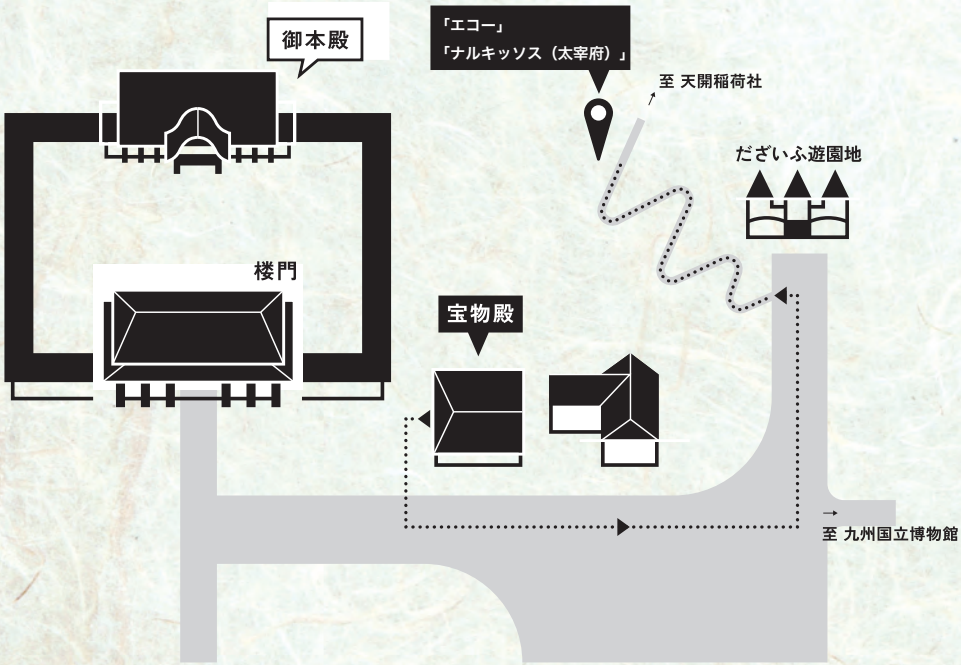
また、新たに文書館裏の天開稲荷社に向かう遊歩道の中程には、立体作品「エコー」と「ナルキッソス(太宰府)」が恒久設置されました。「エコー」には蓄光性の顔料が使われており、日中は太陽光と六本のブラックライト「ナルキッソス」により光が蓄えられ、日没時には、青い光を放出します。

境内を歩き、話し、長い時間の思索を経て田島氏が辿り着いた、自然と人の精神のエネルギーの可視化を試みる作品の数々をぜひご覧ください。

田島美加「Appear」

令和四年五月十五日(日)～十月十日(月・祝)

「エコー」・「ナルキッソス（太宰府）」　左：日没後　右：日中　©Mika Tajima, Courtesy of TARO NASU, Photo by Yasushi Ichikawa



田島美加（Mika Tajima）
1975年ロサンゼルス生まれ
現在はニューヨークにて制作活動中
彫刻、建築、音楽、パフォーマンスなど多様な要素を組み合わせた作品で知られる。
日本では2013年に森美術館（東京）の「六本木クロッシング2013:アウト・オブ・ダウト」展に参加、モダニズム建築の巨匠コルビュジエの作品を自身の作品と組み合わせたインスタレーション等で高い評価を得る。
その他の主な展覧会に、2022年「Spectral」（TARO NASU、東京）、「Hawai'i Triennial 2022」（ホノルル美術館、ハワイ）、2019年「岡山芸術交流2019：もし蛇が」（岡山）、2018年「Programmed: Rules, Codes, and Choreographies in Art, 1965–2018」（ホイットニー美術館、ニューヨーク）、「ÆTHER」（ボルサンコンテンポラリー、イスタンブール）、2017年「Touchless」（TARO NASU、東京）、2016年「Meridian (Gold)」（スカルプチャーセンター、ニューヨーク）、2015年「Human Synth」（TARO NASU、東京）、2012年「Pyramids and Pineapples」（アスペン美術館、アスペン）、「After the Martini Shot」（シアトル美術館、シアトル）、2010年「The Double」（バス美術館、マイアミ）、2009年「Today is Not a Dress Rehearsal」with Charles Atlas and New Humans（サンフランシスコ近代美術館、サンフランシスコ）など。

太宰府天満宮―建築史余話　その九

福岡県文化財保護審議会有形文化財部会　専門委員　山野　善郎

前回「建築史余話　その八」で明治以降の修理履歴をご紹介した志賀社本殿は、本年度から御屋根の葺き替え工事が始まります。

朱塗りの太鼓橋の間の中島に、慎ましく佇むその優美な姿は、しばらく覆屋に包まれ目にできなくなります。しかし遠からず、檜皮葺の香りも芳しく蘇るでしょう。その日を皆様とともに、待ち望みたく存じます。

さて今回の主題は、多くの方々が列をなし、時には昇殿して、御祈願なさる天満宮御本殿についてです。

図１ 御本殿（南面）

【御本殿の建築様式】

楼門から、廻廊に囲まれた神域の最奥部を望むと、朱と金箔に彩られた御本殿が目に映ります。正面に向拝、左右に車寄せを附し、右大臣まで務められた菅原道真公の華やかな前半生に相応しいお姿です。(図１)

しかし、授与所の脇門を通り抜け北側から眺めると、素木(しらき)に檜皮葺、力強く風格漂う、別の相貌に接することができます。(図２)

五間社(ごけんしゃ)流造(ながれづくり)という建築様式です。

図２ 御本殿（北西側面）

北側の背面に六本の柱が立ち並びますから「柱間(はしらま)」は五つ、だから五間社と呼びます。背を上に冊子を開いた形の屋根は切妻造ですが、天満宮の場合は孫庇(まごびさし)を、流れるような傾斜で正面側に延ばしますから、これを流造と称します。孫庇のおかげで、昇殿者が着座する空間は広やかです。(図３)

勾欄付の透縁の奥を「殿上(てんじょう)」と呼んだ時期があったなど、江戸時代の記録については、拙稿「建築史余話　その二」(二〇一九年新年号)で触れました。ここでは、享和二年(一八〇二)の「天満宮九百年御忌勤行記録」所収の指図(さしず)を再掲出して紹介に代えます。(参考図)

図３ 御本殿内部（南西隅から）

なお、元禄十五年(一七〇二)の「八百御年忌記禄(ママ)」には

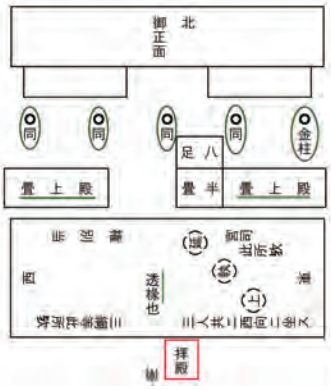
仮拝殿於神前新造立之、三間四面、以唐油紙覆之／瑠璃段、八足之机再興

とあり、仮拝殿を臨時に造立する等、年忌大祭の形式は元禄度に整い、享和度も踏襲したことが判ります。

御本殿の正面には、中央が盛り上がった特徴的な庇が突き出し、これを二本の柱が支えています。この庇の屋根形状は「唐破風(からはふ)」と呼ばれます。(図４)

正面に突き出したこの部分は「向拝(こうはい、または、ごはい)」が通称

図４ 向拝の唐破風



参考図「拝殿」書込（連歌史資料）

ですが、十九世紀の天満宮では、ここを「拝殿」と呼んだ可能性があると「その二」では指摘しました。

その当否はしばらく措き、次節では、御本殿の造営と修理に関わる建築史的な手がかりについて、これまでに知り得たことの一部を簡単にまとめておきましょう。

図５ 棟束墨書（部分）

図６ 野屋根に残る棟札類（一部）

【御本殿の建築史的履歴】

歴史的建造物は寡黙ですが、注意深く調べ、耳を傾けると、実に多くの情報をこっそり教えてくれます。

一番分かりやすいのは、天井に隠されて普段は目にする機会のない「野屋根」に残る文字情報です。

土田充義博士「太宰府天満宮の建築」（『菅原道真と太宰府天満宮 下巻』所収、一九七五年）によると、野屋根の梁には文禄三年（一五九四）が三箇所、真柱に文禄二年が一箇所、それぞれ墨書されていると言います。その真柱なのでしょうか、棟木（むなぎ）を支える束の一つに「文禄二年」の文字を確認できました。（図５）

図７棟木の斫（はつり）痕

来年度からの御本殿屋根葺き替え工事が進むに伴い、往時の工匠の落書を含め木材に記された未知の文字情報が発見できると、期待されます。

それ以外に、板に墨書して天井裏に修理記録を残すことも、しばしば行われます。いわゆる棟札（むなふだ）や置札（おきふだ）がこれに当たります。御本殿の野屋根でも、天満宮の役職者や工匠の名、そして年月日を記した板を、これまでに十七枚確認できました。前掲土田論文でも九枚に言及しています。現状では数カ所にまとめて釘止めされており当初の位置が判らないのは残念ですが、古記録と照合することで、新たな知見が付け加えられるでしょう。（図６）

文字情報だけではありません。

長い年月を経てきた建造物には、それ自体に多くの情報が、文字通り「刻み込まれて」いるのです。御本殿の背面や側面の庇、野屋根には、壁板をはじめ、棟木、束（つか）、貫（ぬき）などの部材表面に、それを加工した工具の痕がはっきりと残っています。（図７）

現在なら、木材の表面は電動工具で、十数年前までは職人さんが自慢の鉋（かんな）で、鏡のように平滑に仕上げられたことでしょう。

しかし、その鉋は、いわゆる台鉋であり、天正六年（一五七八）焼失時に普及していた工具ではありません。御本殿が造営された当時は、釿（ちょうな）や鑓鉋（やりがんな）等で、繰り返し欠き取り（建築用語では「斫（はつり）」）、表面を仕上げたのです。※1

太宰府天満宮御本殿に刻まれた造営と修理の履歴が、今回の屋根葺き替え工事で、さらに詳しく明らかになることを願って止みません。

※1 渡邉晶『大工道具の日本史』、吉川金次『ものと人間の文化史51斧・鑿・鉋』他

※2 写真撮影は、山野善紀（現・国立文化財機構文化財防災センター職員）が担当

山野　善郎（やまのよしろう）
工学博士、建築史塾アルキスト代表、元九州大学助教授、菅原道真公一千百二十五年太宰府天満宮式年大祭御本殿調査有識者会議委員、福岡県文化財保護審議会有形文化財部会専門委員、主な著書は、『対馬海峡と宗像の古墳文化』、『日本建築史基礎資料集成一（社殿Ⅰ）』、『日本建築みどころ発見シリーズ神社』他

崇敬会だより

田主丸連合会 グラウンドゴルフ大会

四月十一日、田主丸連合会(田中嘉津美会長)のグラウンドゴルフ大会が行われました。柔らかな春の日差しの中、久しぶりの外行事に気持ちの良い汗をかきながら、四十三名が親睦を深めました。

崇敬会行事としては久しぶりでしたが、皆さま練習は怠らず、楽しくもハイレベルな大会となりました。

勝負どころの一打

青年部臨時清掃奉仕

四月十日、臨時の清掃奉仕に二十五名がご奉仕に駆け付けました。お互いに顔を見ながら力を合わせる行事を行いたいという思いで、青年部のみの少人数で執り行いました。

八時半からの朝拝神事に参列の後、御本殿裏手の誠の滝と周辺の摂末社群の清掃を行い、隙間に積もった落ち葉を掻きだしていただく等、実に隅々まで丁寧にご奉仕をいただきました。

早くも青紅葉の時期に、天候にも恵まれ、「自分たちで磨いたお社はなおさら輝いて見える」とのご感想をいただきながら、和やかに終了いたしました。

今回は臨時開催と致しましたが、今後は定期開催を考えております。

誠の滝の落ち葉引き上げも行いました

ちょっと一口～誠の滝について～

御本殿裏手、楓が枝を精一杯に伸ばすその先に「誠の滝」はあります。明治十五年に氏子崇敬者によってつくられた人工の滝です。命名は小松宮彰仁親王(こまつのみやあきひとしんのう)で、滝の中央の岩に御染筆を写したものが残っています。竣工に際し、五卿の一人、東久世通禧(ひがしくぜみちとみ)卿は「千代かけてこころの池はすみぬべしまことのたきを水上にして」の和歌を寄せられました。

美しい緑に囲まれた滝
右手の岩に「誠滝」の字が見える

令和四年度支部長代表者会

四月二十五日、早くも梅の実が太り始める中に三年ぶりの支部長代表者会を開催し、百三十名の月次祭御参列を賜りました。

続く余香殿では、コロナ禍の影響により会員の減少もある中、たくさんの新入会もいただいております事、当宮では神事祭事を中止することなく、本義に近い形で粛々と執り行い、皆様のご健勝とご平安を祈り続けて来ました事を、宮司よりご報告申し上げました。

まだまだ大事を取りましてお直会は中止いたしました。秋の奉幣大祭には気兼ねなく皆様と酌み交わせますよう、心から祈っております。

日田連合会日帰り研修旅行

令和四年五月十三日、日田連合会(杉野義光会長)の日帰り研修旅行が開催され、四十三名が参加されました。

生憎の天気でしたが、目的地である防府天満宮(山口県防府市)へ到着すると、天もお出迎えくだ

３年ぶりの敬神生活の綱領唱和
明日へ向かって誓い新たに

さったかの如く小雨となり、若々しい木々の緑も相まって厳かな雰囲気の中にお参りをさせていただきました。

参拝の後にはお茶室「芳松庵」にて、茶聖とも称される天神さまについて、また、山のすべての植生を表現した見事なお庭のご説明を頂戴し、ゆっくりとした時間を過ごしました。

防府天満宮にとりましても、神社関係の団体参拝はコロナ禍以降約二年ぶりとのことで、相互に元気を分かち合うことができたように思います。明日の我が国と世界平和の為、共に頑張ろうと思える、有意義な研修旅行となりました。

旧崇敬会担当（平成 31 年担当：現防府天満宮権禰宜）
高橋さんと集合写真　春風楼にて

役員委嘱

崇敬会支部並びに皆さまのお世話をしていただく役員の委嘱が左記の通り行われました。何卒ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

日田連合会（監　査）	藤　原　久美子
大野城連合会　山田支部（支部長）	中　村　真　一
大野城連合会　山田支部（世話係）	山　本　后　代
大野城連合会　瓦田支部（支部長）	北　崎　　浩

（順不同敬称略）

有朋 ～広がる信仰の輪～

新しく法人会員にご加入いただいた皆さまをご紹介します。天神さまの誠心を戴き、よりよい社会づくりの為に、末永く宜しくお願い申し上げます。

・令和4年2月ご加入
福岡銀行二日市支店（筑紫野市）
・令和4年3月ご加入
東福岡米穀株式会社（宮若市）
・令和4年3月ご加入
株式会社カネガエ（八女郡）

太宰府天満宮崇敬会ご入会のおすすめ

～天神さまとつくる社会～

天神さまの誠心（まことごころ）をいただき、自己の修養を高めるとともに、一家の幸せと繁栄とを願い、日本文化の輝かしい伝統を守り、より良い地域、社会、国づくり、広くは世界平和への貢献に努める崇敬者の集いです。志を同じくする会員同士交流を深めながら活動しています。現在の会員数は約四五〇〇名（令和四年六月現在）となっております。

～国境を越えた奉仕活動～

道真公は外交にも多大な功績を残され、我が国の発展に寄与されました。

「国際奉仕婦人部」では、留学生との友好親善に努めています。福岡太宰府を第二の故郷と慕い、世界で活躍する方も少なくありません。

～見識を深めながら～

天神さまゆかりの神社参拝や歴史を探訪し、自己の修養を高める「研修旅行」を開催しています。

会員相互の親睦を深め、明日の明るい社会を担う使命を確かめ合い、敬神崇祖の念を新たにしています。

～未来を担う青少年育成～

天神さまは学問はもとより「子どもの守り神」としても愛されております。

「青年部」では空手・柔道・剣道・弓道の他吹奏楽に日々勤しみ自己の修養に励む少年少女の活躍を応援し、（公財）太宰府顕彰会の主催する各種大会に協力しています。

年会費

・正会員　三、〇〇〇円
・家族会員　二、〇〇〇円
・名誉会員　一〇、〇〇〇円
・法人会員　三〇、〇〇〇円
この他、国際奉仕婦人部・青年部を募集しています

天神さまと触れあう

お問い合わせ、お申し込み先
崇敬会本部　☎092-922-8484

飛梅講社だより

「飛梅講社」とは、天神さまのみあとを慕って飛んできた御神木「とびうめ」の名にあやかって、結集命名された信者崇敬者の集いです。

第七十二回飛梅講社二十五日会定例総会

五月二十五日

令和四年五月二十五日、七十二回目となりました本年度の総会では、役員改選に伴い、第十一代会長として久保寺重規氏の就任が決まりました。他、新役員の皆さまは以下の通りです。飛梅講社の輪を牽引し、天神さまの「誠心」を世に広く伝えていただきますよう、末永く何卒宜しくお願い申し上げます。

二期四年間にわたってご尽力いただきました福岡力太郎前会長は顧問に就任されました。そのご功績に対し、この場をお借りして御礼申し上げます。

久保寺重規新会長

福岡力太郎前会長

飛梅講社二十五日会 令和四年・令和五年度役員名簿

役職	氏名
顧問	福岡力太郎
参与	田代勝男
会長	久保寺重規
副会長	井口秀喜
副会長	城戸暁美
事務長	大西　治
会計長	井上辰男
直会長	内田美義
直会	岩下誠一
理事	坂井良輔
理事	菅原久和
理事	林　祐助
理事	前原　正
理事	志閒久宣
理事	大坪佐重喜
理事	松永勝美
理事	合屋豊子
理事	田代二三男
理事	四ヶ所　勝
理事	出水清治
理事	矢野俊一
理事	上野美喜男
理事	山見茂樹
理事	上野勝昭
監事	進藤啓一
監事	大本隆久

（順不同敬称略）

今年は神宮大麻頒布百五十周年

「神宮大麻」は神宮で奉製され、全国にお頒かちされています。一月に神宮において「大麻暦奉製始祭」が行われ、四月には、「大麻用材伐始祭」、九月に「大麻暦頒布始祭」が斎行されます。この九月のお祭りにて、各県神社庁の代表に神宮大麻が手渡され、各県神社庁から各支部へ、各支部から各神社へ、そして各神社より皆さまのもとへお頒かちいたします。

この神宮大麻は、古くは伊勢の御師と呼ばれる御祈禱師が頒布していた御祓大麻というものが起源であり、その後明治天皇の神宮と私たち国民との繋がりを途絶えさせてはいけないという、思し召しにより頒布されるようになった大神様の「おおみしるし」であります。

今年は明治天皇が大神様と各ご家庭とのご縁を通じた皆さまの幸せを願われ、神宮大麻の頒布を始められて百五十年の節目を迎えます。皆さまも神宮大麻をお祀りし、ご家庭の平穏をお祈りください。

大神様と皆さまをつなぐ大切な「神宮大麻」は、一つ一つ丁寧に祭典を重ねながら、お頒かちされています。年末に皆さまにお届け致します大麻は、早くも一月から準備が始まり、伊勢の神宮では専用の祭場で「大麻暦奉製始祭」が斎行されます。その後、できあがりました大麻は伊勢の神宮で大切に清浄に保管され、九月の祭典を待ちます。

九月には、「大麻暦頒布始祭」に各県神社庁の代表者が集まり、皆さまの大麻をお預かりして参ります。各県に配られた大麻は、十月ごろには県神社庁支部へ、それから各神社へと配られます。

1月伊勢の神宮で「大麻暦奉製始祭」
資料提供：神宮司庁

県神社庁支部より各神社へ
（筑紫支部大麻頒布式）

飛梅講社の皆さまにお届けいたしておりますお札は、太宰府天満宮の大麻です。お住いの氏神神社から、神宮大麻と氏神様のお札をお受けいただき、併せて太宰府天満宮の大麻をお祀りくださいますと共に、神様と暮らす美しい日本の伝統文化を次世代へと語り継いでいただけますと幸いに存じます。

皆さまのご家庭へ
（飛梅講社筑穂連合支部大麻頒布式）

飛梅講社役員表彰者御芳名

飛梅講社役員として神徳の宣揚を代々に亘り継承なされました方々並びに、永年に亘りご貢献頂きました役員の皆さま方の表彰を行っております。
本年表彰をお受けの方は左記の通りです。永年に亘るご功績に心より感謝申し上げますと共に、今後も何卒宜しくご尽力賜りますようお願い申し上げます。

事由	役職	氏名	住所
父祖四代	支部長	濱地　稔	福岡市西区元岡
〃	支部長	城　利隆	佐賀県唐津市相知町
永年	支部長	毛利栄次	宮若市脇田
〃	副支部長	吉住恵美子	古賀市薦野
〃	世話係	三宅満男	筑紫野市常松

（順不同敬称略）

飛梅講社役員委嘱

講員の皆様のお世話をしていただく新役員の委嘱が左記の通り行われました。
何卒、宜しくご尽力賜りますようお願い申し上げます。

役職	氏名	住所
支部長	藤原　純子	糸島市二丈吉井
〃	楢崎　年秀	糸島市二丈鹿家
〃	坂本　武	佐賀県唐津市鳩川
〃	山口　孝司	佐賀県東松浦郡玄海町
〃	井上　勝基	糸島市雷山
〃	藤瀬　秋子	糸島市岩本
〃	佐野　正博	朝倉市楢原
〃	椿　浩則	朝倉市福光
〃	林　良一	朝倉市牛鶴
〃	田中　秀和	長崎県大村市原町
〃	中村　直己	佐賀県藤津郡太良町
〃	倉元　三雄	福津市本木
〃	花田　茂見	宗像市河東
〃	山崎華久美	愛媛県宇和島市三間町

役職	氏名	住所
支部長	稲葉　省介	筑紫野市宮の森
〃	日永田隆幸	筑紫野市香園
〃	市川　康夫	筑紫野市大石
〃	木村　茂	筑紫野市大字原
〃	田中　政信	佐賀市富士町栗並
〃	常岡　滋彦	古賀市小竹
副支部長	井上　和秀	糸島市雷山
〃	道竹　昇	佐賀県藤津郡太良町
〃	安松　孝秀	糟屋郡粕屋町酒殿
〃	吉武　信一	糟屋郡粕屋町酒殿
〃	藤田　和秀	佐賀市富士町栗並
〃	栗並　重幸	佐賀市富士町栗並
〃	中野　幸雄	古賀市小竹

（順不同敬称略）

天神さまと暮らす

飛梅講社・二十五日会ご入会のおすすめ

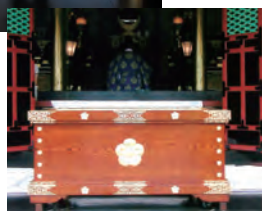
～天神さまと過ごす一年～

お誕生日当日早朝、「誕生祭」を斎行致します。
毎朝のお供え「御日供祭」に合わせて、お誕生の佳き日を迎えられた皆様のお名前をお読み上げいたします。
天神さまのご加護をより一層いただかれ、ご健康とご長寿をお祈りいたします。

～天神さまへの月参りを誓い合って～

活動方針
一、天神さまへの信仰を中心に、敬神崇祖の念を推進しましょう。
二、国民の祝祭日に、国旗を掲揚しましょう。
三、二十五日会の輪を広げ月次祭には努めて、お参りしましょう。

「飛梅講社二十五日会」は、菅公の「誠心」を慕って、ご縁日である毎月二十五日の月次祭に参列する飛梅講社員の集いです。会員相互の修養と親睦を図り、太宰府天満宮を奉賛し、飛梅講社の中軸、また推進力とならんことを誓い合い、自主的に運営されています。



御神輿・楽太鼓・梅紋幕・賽物箱 …
二十五日会ご奉納の数々

その他、各種祭典行事のご案内をお届けいたします。
詳しいご案内・申し込み用紙ご送付のご用命は　飛梅講社本部　☎092-922-8484

みコラム

天神さまと夏

巫女　犬塚　協子

ちりん。七色の短冊がひるがえり、境内に風鈴の音色が響きます。

暑さに負けぬよう体を震わせ力強く鳴き続けるセミたちの声が聞こえるだけで、不思議と涼を感じられる夏がやってきました。

豊かな自然に囲まれた太宰府天満宮は、四季の移ろいを楽しむことのできる場所です。

淡い桃色や白色の花びらがひらりと舞い、卒業式を終えた袴姿の学生が彩りを添える春。

燦々とした太陽に樟の葉が眩しく光る夏。

赤く染まる木の葉が御本殿の色と重なる紅葉の秋。

境内一面が真っ白に雪化粧され、寒気にめげず梅がそっとほころぶ冬。

私たちは美しい季節を天神さまと共に過ごしています。日々、華やかに移ろいゆく四季ですが、私には夏の青々とした茅の輪を見るたび、思い出す記憶があります。

茅の輪とは、茅や藁を束ねたもので、横八の字を描くように左・右・左と三回くぐることで罪や穢れ、災疫が祓われると言います。私が初めて茅の輪を目にしたのは二年前、大学生の頃です。巫女として天神さまのお側でご奉仕をしたいと思い、採用試験を受けに太宰府に訪れた日のことでした。試験の日、面接を控え酷く緊張した面持ちで茅の輪をくぐる大学生だった私。茅の輪と切っても切り離せない大事な思い出です。

茅の輪

あれから二年の歳月が経ち、巫女として二回目の夏を迎えます。今年の夏は御本殿で舞人として榊舞を奏上し、奉仕者や参列者の方々と共に茅の輪をくぐることになりました。

海ならず　たたへる水の底までも
清き心は　月ぞ照らさむ

この御歌は天神さまがお詠みになられたもので、私たち巫女は御歌に合わせて榊舞を奏上いたします。

「海よりもさらに深く水をたたえている底のように清浄な心であれば、月の明かりが照らしてくれるでしょう」

この御歌のように天神さまはご生涯を通して誠の心（至誠）を大切にされました。何事も誠実に清き心で向き合えば、天神さまはいつも私たちをお見守りくださいます。暗いニュースも続く昨今ではありますが、このような時こそ至誠の精神で日々努めることを天神さまは私たちにお示しになられているのかもしれません。

舞人として茅の輪をくぐる今年の夏、天神さまが大切にされた誠の心を胸に刻み、二年前初めて茅の輪をくぐった自分よりも少し成長できたと感じられるよう、ご奉仕したいと思います。

当宮では、七月二十四日に暑さ厳しい夏を健やかにお過ごしいただけるよう「夏越祭」を、二十五日には天神さまの御生誕をお祝いする「御誕生祭」を斎行いたします。

両日の夕刻からは屋台や出店で賑わう夏祭りが開かれ、天神ひろばの提灯の下、太鼓の律動に合わせて地元の皆さまを始めとした多くの方々が夏越踊りを賑わせてくださいます。また二十五日には日暮れと共に、心字池や太鼓橋を中心に約千本の蝋燭に火を灯し、天神さまの御神慮をお慰め申し上げる「千灯明」を執り行います。夏祭りに訪れた皆さまのご協力で、一つまたひとつと蝋燭に火が灯り、暗闇の中、煌々と輝く太鼓橋は圧巻の光景です。

いよいよ今年の夏も本番を迎えます。今年の夏祭りでは多くの出店が開かれ、皆さまに参加していただける夏越踊りやゆかたコンテストなどが行われる予定です。また夏季限定の水みくじの授与や風鈴など、この時期でしか味わうことのできない多くの催しを予定しています。

当宮の夏で、お参りいただく方々が元気になっていただけますよう心からお祈りし、夏風香る飛梅の木の下でお一人おひとりの笑顔とお会いできることを心待ちにしております。

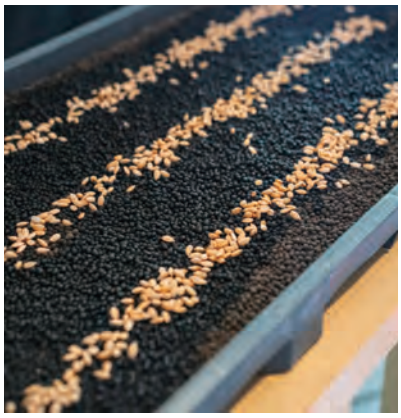
夏越踊り

千灯明

天神の杜ハイライト

斎田播種祭

当宮では天神さまへの朝夕のお供えをはじめ、すべての祭典・神事に用いられるお米を斎田で作ります。このお米作りの無事をお祈りし、種蒔きをする神事が毎年五月一日に御本殿で斎行されます。宮司が蒔いた籾に巫女が水をやり、育った苗は六月十一日の斎田御田植祭にて五穀豊穣を願って植えられました。



ちびっこ夢ひろば

五月四日（みどりの日）、五日（こどもの日）に、「ちびっ子夢ひろば」を開催いたしました。今年で、三十八回目を迎える「ちびっ子夢ひろば」は、和太鼓演奏・神楽・和舞踊の伝統芸能など、こども達の日ごろの練習の成果を特設ステージにて披露しました。また、二日間にわたり、九州サイエンスラボの「かず先生」によるサイエンスショーを実施し、絵馬堂横では、池坊が教える子ども生花教室が行われ境内が子供たちの声で賑わいました。

飛梅ちぎり神事

五月十八日、道真公をお慕いし京より一夜にして飛来したとされる御神木「飛梅」の実を神職・巫女が採取、奉納する神事「飛梅ちぎり神事」が執り行われました。本年は六六八個の実が御神前に捧げられ、一生一代のお守り「飛梅御守」として大事に奉製されます。本年は例年より梅の実の実りが早く境内六千本の梅の実も職員に加え崇敬会青年部・県内の幼稚園・保育園の子供たちにご奉仕いただき採取されました。

斎田御田植祭

今年の豊作を祈念し、五月一日の「斎田播種祭」より大事に育てられた苗を植える祭事です。太宰府市観世音寺にある当宮の斎田にて、荒天や害虫などの被害にあうことなく無事収穫の時期を迎えられるよう祭典が執り行われ、あわせて巫女による「八乙女の舞」を奉納いたしました。

花手水

今もなお、日本中・世界中が新型コロナウイルスの猛威に苦しんでいる中、少しでも皆様が晴れやかに、そして爽やかな気持ちになっていただけるよう願い、天神さまの杜に咲き誇る紫陽花を浮かべ本年で三回目となる「花手水」を制作いたしました。

ご参拝の折には水面いっぱいに浮かぶ色鮮やかな紫陽花をお楽しみください。

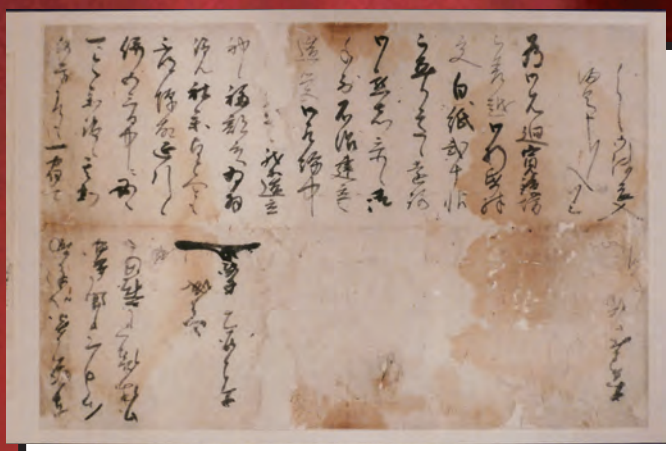
初夏を迎えた太宰府天満宮

四月中旬頃より、大小約百本ある樟が生命力みなぎる若葉に生え変わります。私たちを優しく包み込みながら天神さまの鎮守の杜を見守り続けています。若葉が色濃くなるにつれ境内のつつじも色鮮やかに咲き誇り、東神苑の菖蒲池では五月下旬から六月上旬にかけ、約五十五種・三万本の花菖蒲の麗しい花々が咲き誇りました。

太宰府天満宮の文化財

86 山中山城守長俊書状

慶長３年（1598）
太宰府天満宮文書
重要文化財



山中山城守長俊書状

尚々御使畏入、満足申候、以上、
為御見廻、寛鏡坊被差越、御折紙
殊更白紙二十帖被懸御意候、遠路
御懇志忝候、御手前石治建立之造
営御取紛中、［　　］我等造
立初候、福部殿へ為拝覧社参望候
へとも、不得隙故延引候、併五三
日中ニ必々可令参詣候、其刻何方に
ても、一宿可奉憑之条、以貴面心
事可申述候、委曲御使僧へ申候、
恐惶謹言

十一月廿二日　山々城
大鳥居御坊　長俊（花押）
貴報

この書状は、破れたところがあるため正確な内容はわかりませんが、天満宮から白紙二十帖を贈られたお礼と、石田三成が天満宮を造営中であること、山中山城守長俊が、延期していた福部社への参詣をするため、宿の手配を依頼することなどが書かれています。

福部社は、ご本殿の裏側に並ぶ摂末社のうち、ご本殿から見て一番左側に建つお社で、ご祭神は菅原道真公の学問の先生である島田忠臣公です。平安時代末期には建っていたことがわかっている最も古くからあるお社の一つです。天満宮では、子どもの守り神として、また「ふくべ」という音から、水に浮く瓢箪を連想して「水難よけ」の神様として信仰されてきました。社伝によれば、文禄二年（一五九三）、戦国時代の武将、大谷刑部吉継が造営しています。

福部社

書状の差出人、山中山城守長俊（一五四七～一六〇七）は、近江甲賀（現在の滋賀県甲賀郡）の出身の武将です。初め六角氏に仕え、その後に柴田勝家に属し、賤ヶ岳の戦い（一五八三）で柴田氏が滅んでからは丹羽氏に仕え、その後天正十三年（一五八五）豊臣秀吉に召されて右筆となりました。右筆というのは、本来は武家において文章を作成する係のことですが、豊臣秀吉は「右筆衆」という職を制定し、行政文書の作成だけでなく、政策決定に関与する重要な役割を担わせていました。文禄の役には、秀吉に同行して名護屋城に在陣し、取り次ぎ役をしていたことが、お茶会の記録などに書かれています。文禄二年（一五九三）ごろ、秀吉の領地の代官を歴任し、文禄四年に加増されて一万石となり大名に列せられました。慶長三年（一五九八）には、秀吉が博多で住むところやその他の準備を命じられています。その後、慶長の役では博多において、兵糧米の調達などで活躍しました。

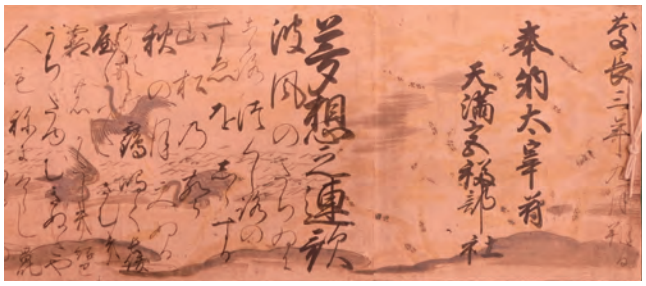
関ヶ原の戦いでは西軍に属し、留守居役として大坂城を守備していました。このため、徳川の世になってからは改易になりました。後に許されて徳川家康に抱えられましたが、やがて京都に隠棲し、慶長十二年（一六〇七）死去しました。

文筆に優れ、秀吉の命により『太平記』の続編『中古日本治乱記』という本を著したことでも有名です。

太宰府天満宮には、慶長三年九月一日、福部社に奉納した「夢想連歌」一巻が収蔵されています。「夢想連歌」とは夢の中で得た句を神仏のお告げとして、神仏に奉謝するためにその句に続く百韻を作る連歌です。山中長俊は、神から授けられた句を発句に、京都の連歌師里村家の人々や北野天満宮の社人とともにこの一巻をつくりました。

今回紹介した書状は、山中長俊が新しい福部社に、「夢想連歌」を奉納したことと直接関係する大切な史料なのです。

（宮崎由季）



山中山城守長俊奉納百韻連歌

ご案内

茅の輪くぐり

七月、朱色の楼門前に青々とした茅の輪が立てられる頃、太宰府の夏もいよいよ盛りを迎えます。

「茅の輪くぐり」の神事は、蘇民将来の誠心誠意尽くした持て成しに感動した素戔嗚尊が「茅の輪を腰につけていれば疫病から免れることができるだろう」と教示した故事に由来すると言われています。

茅の輪を8の字で左・右・左と三度くぐる事で皆さまの罪穢や災疫が祓われ、ひと夏を清々しい気持ちでお過ごしいただけるよう祈念いたします。

お上りの儀

九月二十一日より五日間に渡り斎行される神幸式大祭は、当宮最重儀の神事で、康和三年（一一〇一）大宰権帥大江匡房卿により始められました。

二十三日に斎行される「お上りの儀」では、御神輿の出立に先立ち天神さまをお慰め奉るための「倭舞」が榎社にて奏上されます。その後、厳粛な雰囲気の中、氏子を中心とした与丁に奉舁され、御神輿は榎社を発ち御本殿へと向かい始めます。

夕刻、日暮れに染まる御神輿が参道を粛々と進む様は雅やかな平安時代を偲び起させます。

七月・八月・九月の祭事暦

七月

一日　月次祭・講社祭
七日　七夕祭
十五日　天拝山社・榎社浄妙尼社
紅姫社・隈麿公奥津城夏祭り
二十四日　夏越祭・茅の輪くぐり
二十五日　御誕生祭・茅の輪くぐり
千灯明

八月

一日　月次祭・講社祭
二十五日　月次祭・講社祭
二十八日　大行事
注連打奉納相撲大会
赤ちゃん土俵入り

九月

一日　月次祭・講社祭
神幸式大祭お注連立て
四日　筆塚祭
十九日　敬老祭
二十一日　神幸式大祭始祭
二十二日　お下りの儀
本殿遷御祭・出御祭
行宮献饌祭
二十三日　お上りの儀
浮殿献饌祭・本殿還御祭
二十四日　古式献饌祭
二十五日　例祭
千灯明

※二十一日～二十五日　神幸式大祭期間
※祭典・行事はやむを得ず延期、中止となることがありますので、詳しくは太宰府天満宮社務所までお問い合わせください。

飛　梅　第２０３号
発行日　令和４年６月２５日
発行所　太宰府天満宮社務所
福岡県太宰府市宰府４－７－１
電話(092)922－8225
発行人　西高辻信宏
編集長　松大路信潔
編集員　石川史嗣・戸髙宗徳・是則慶秀・三橋彰弘
味酒安儀・松吉保知・足立純一・渡辺美和子
原田愛子・長澤彩
印刷所　株式会社　四ヶ所

本誌に掲載する文章・図表等の著作権は著作者に、史料の所有権は所蔵元に帰属します。また、掲載内容を無断で使用・転載することを禁じます。

太宰府天満宮公式ウェブサイト
https://www.dazaifutenmangu.or.jp/

太宰府天満宮公式 Instagram、Facebook、Twitter では四季折々の様々な祭典、行事をご紹介しております。

公式 YouTube チャンネルにて
美しい動画をお楽しみください

太宰府天満宮のいまをInstagramで